

目次

読者のみなさんへのよびかけ

〔特に、初めて筆者の著作に接するかたがたへ〕

i

イントロダクション

3

表現を掘り起こすとは

テクストの概念

仮名文の表現解析と筆者との関わり

こういがかたがたはぜひ本書を

疑似講読

テクストとして《あづまくだり》を読む

表現解析のための予備知識

天福本のイメージを頭に入れる

あづまくだり プロローグ（第一段～第八段）

第二段 女はらから住みけり 27

『伊勢物語』と在原業平との関係

昔、男がいた。——「男」という語の喚起するイメージ

単純な疑問

和文のなかの和歌的技法

仮名の体系の形成と仮名から平仮名への移行

初読と次読

音便形の表現効果

みやび（雅）

第二段 かのまめ男 68

第三段 むぐらの宿に寝もしなむ 79

第四段 我が身ひとつは 82

第五段 宵々ごとにうちも寝ななむ 87

第六段 露と答へて消えなましものを 91

——
接続構文

第七段 うらやましくも帰る波かな 97

——
『後撰和歌集』の和歌
名作か凡作か

第八段 あさまの岳に立つ煙 103

——
「段」に分割された作品の全体的構成

第2章

あづまくだり 主部（第九段）

第九段Ⅰ 道知れる人もなくて、まどひ行きけり 114

——
第八段冒頭部との比較
もとより友とする人
頻出する「けり」の表現効果

第九段Ⅱ 八つ橋といふ所 125

——
京↓伊勢↓尾張↓三河

ケリの機能

『古今和歌集』、「物名」部「を・み・な・へ・し」の和歌の表現解析

「か・き・つ・は・た」の和歌の表現解析

本居宣長『古今集遠鏡』——現代語訳のバイオニア

折句

Acrostic (アクロステイック)

テシマウ、テシマッタ

第九段Ⅲ

修行者会ひたり

173

「います」から〈おられる〉へ

第九段Ⅳ

鹿の子まだらに雪の降るらむ

188

ナムの機能

第九段Ⅴ

これなむ都鳥

211

『古今和歌集』旋頭歌の「白く咲ける花」

『古今和歌集』の詞書

テクストに不要な語句はない——物語と歌集の詞書との違い

助詞へと助詞^二

「至りぬ」と「至れりけるに」

「咲きたり」と「咲けりける」

詞書で和歌の内容を変える

鞆旅の歌としての「名にし負はば」
あづまぢの道の果て

あづまくだり エピローグ（第十段〜第十五段）

第十段

たのむの雁 247

『万葉集』のタノモ

「田十の十面」↓タノモ

タノモと田んぼ

「ん」の仮名

「田のも」から「田のむ（の雁）」へ

第十一段

空行く月の巡り会ふまで 269

『拾遺和歌集』の和歌との関係

第十二段

夫も籠もれり我も籠もれり 276

つま
言語の線条性

第十三段

むさしあふみ 285

第十四段 きつにはめなで 291

——きつにはめなで

第十五段 さるさがなきえびす心 309

——解釈の分かれ目はどこに？

まとめ テクストとしての《あづまくだり》挿話群 317

あづまくだり挿話群（第一段〜第十五段） 321

あとがき 331

掲載図版一覧 335